大阪大谷大学歴史文化研究第19号 164-182頁 2019年3月

二代目ブルゴーニュ公ジャン無畏公の肖像

今井澄子

はじめに

人物のイメージを描出する肖像はさまざまな時代・地域で制作されてきた。ヨーロッパにおいては、中世末期にかけて、個人の自意識や現実世界への関心の増加を背景として、王侯貴族の像を中心に表わした[1]。それは、単独の肖像のみならず、写本の献呈場面に描かれたり、宗教主題において聖なる人物に対して跪き祈る祈禱者像として表わされるなど、さまざまな形態をとった。なかでも、独立した板絵の肖像画として現存する最初期の作品のひとつは、一四世紀前半に制作されたフランス王ジャン二世（在位一三五〇〜六四年）の肖像である（図1）[2]。縦が約六〇センチという肖像画としては少々大きなサイズを持ち、プロフィールの胸像で表わされるが、その姿勢は、古代ローマの皇帝を浮き彫りにしたメダルを手本としている[3]。上部には「フランス王ジャン（Jehan roi de France）」と記されているが、この記銘は後補であり、像主が冠を戴いていないことからも、ジャンが王となる前のノルマンディー公時代に描かれた絵画であると推定される。

ジャン二世の末子フィリップ（図2、一三四二〜一四〇四年）は、一三六三年にブルゴーニュの地を譲り受け、ヴァロワ家系の初代ブルゴーニュ公となった（豪胆公）。フィリップの後を継ぎ二代目の公となったのはジャン無畏公であり（図3、在位一四〇四〜一九年）、続く三代目フィリップ善良公（図4、在位一四一九〜六七年）の代にかけて、その領土が拡大された。その勢いはフランスも含めた隣国を脅かすほどであり、四代目のシャルル突進公（図23、在位一四六七〜七七年）が戦死するまで百年余りも繁栄する一大勢力となった。代々のブルゴーニュ公は、巧みな政治力を発揮したばかりでなく、公国外でも手本とされるほど洗練された宮廷文化を営んだ[4]。

ブルゴーニュ公たちは、芸術保護の一環として、また自身の権威を誇示する手段としても、数多くの肖像を制作させた。とくに三代目の公フィリップの肖像画は、肖像制作が盛んになった一五世紀においても、稀にみる量と質を誇った。それはもちろん、自然主義的な様式で細部まで克明に描くことを得意とした一五世紀のフランドル（ネーデルラント）美術の興隆とも無縁ではない[5]。

ところが、二代目の公であったジャン無畏公の肖像に関しては、フィリップ善良公の像ほど多くは残されていない。それは、彼の治世がフィリップ

善良公と比して短かったためとも考えられる。とはいえ、短い治世の間に制作されたと考えれば、ジャンの肖像の数は決して少ないとは言えないうえ、そこには独自の自己表象のあり方と、フィリップ善良公の肖像へとつながるイメージの萌芽を含んでいるように思われる。しかしながら、これまで、ジャンの肖像をテーマとする包括的な研究はほとんど行われていない(6)。

そこで、本稿では、二代目ブルゴーニュ公ジャンの肖像をめぐる包括的な研究の端緒を開くものとして彼の像を概観しつつ、ジャンが肖像を通して自らをどのように規定し、観賞者にどのように提示しようとしていたのか、そしてジャンの意図がどのように受け継がれていったのかという問題を検討したい。

以下ではまず、ジャンの人物像を主に政治的側面から確認し、ジャンの肖像表現を分析する。そして、三代目ブルゴーニュ公フィリップ善良公の肖像との比較を通して、ジャンの自己表象のあり方と、その表現の背景を考察する。

一、「無畏公」ジャンの生涯

ジャンは、初代ブルゴーニュ公フィリップ豪胆公夫妻の長男として一三七一年に生まれ、その名を祖父のフランス王ジャン二世にちなんで授かった(7)。彼は一三八四年にヌヴェール伯となり、一三八五年にマルグリット・ド・バヴィエール（一三六三〜一四二三年）と結婚する。二人の結婚式は現在の北フランスに位置する都市カンブレーで挙げられたが、その際に、マルグリットの弟ヴィルヘルムとジャンの妹マルグリットの婚礼も同時にとり行われた。マルグリットとヴィルヘルムの父アルブレヒト一世（一三三六〜一四〇四年）は、エノー伯・ホラント伯などの称号を手にしていたため、ブルゴーニュ家は、この二重結婚によって、北方のネーデルラントへと進出する道を開いた。

ジャンは、一三九六年にハンガリー王ジギスムントが招集した対オスマン帝国十字軍に、指揮者の一人として参加する(8)。この時のジャンの発言「ただ前進するのがわが強き望み」はよく知られ、以後のジャンの行動基準ともなった(9)。招集された時点では「賢く、礼儀正しく、従順、謙虚、そして温厚な……」(10)などと形容されたジャンは、この遠征の最中に捕虜になったりしたものの、勇猛で「恐れ知らず（sans peur）」な戦いぶりを見せ、のちに「無畏公」と呼ばれるようにもなった。父の支払った大金二〇万フロリンにより解放され生還すると、「勇敢で、大胆で、ひねくれ者で、際限のない野心家だった」と評されたような、好戦的な政治的人生を送ることとなる(11)。

一四〇四年にフィリップ豪胆公が亡くなると、ジャンがブルゴーニュ公の位を継いだ。それは、ジャンの従兄弟のオルレアン公ルイ（一三七二〜一四〇七年）との、フランス宮廷における主導権をめぐる対立を激化させることともなった。そして、一四〇七年一一月二四日には、ルイがパリの路上で殺されるという惨事が起こり、人々に大きな衝撃を与える。この暗殺が「恐れ知らず」のジャンの指示によるものであったことはすぐに知れ渡った。それゆえ、通常ならば暗殺の罪に問われるところだが、人心掌握に長けたジャンは、政治家や学者たちの協力を得ると、ジャンこそがルイに命を狙われており、そのために正当防衛を行ったという言説を作り上げていく。なかでも、パリ大学の教授をつとめた神学者ジャン・プティは、

『オルレアン公ルイの死に際してのブルゴーニュ公の役割の擁護』を執筆し、ルイの悪行を詳細に告発しつつ、ジャンの行為を賞賛した。この論は、公式な場においてプティ自身が朗読し、パリ人たちの世論に大きな影響を与えた。こうしてジャンは追及をかわし、一四〇八年には、ルイの兄にしてフランス王のシャルル六世（在位一三八〇～一四二二年）から赦免を得ることに成功したのである。

ジャン・プティの論は、複本という形でも広まったが、そのなかでも、現在ウィーンに所蔵される一冊には豪華な挿絵が施されている（図5）[12]。そこには、岩の連なる風景を背に、ジャン無畏公を象徴する「ブルゴーニュの獅子」とオルレアン公ルイを表わす「オルレアンの狼」が描かれている。「オルレアンの狼」は、頭上の王冠に襲いかかるが、獅子は前脚を伸ばして防ぎ、狼を血まみれにする。背後の幕屋には、フランス王家を象徴するフルール・ド・リス模様の布が張られているので、冠は明らかにフランス王のものである。そして、下部に添えられた文では「力づくで、狼は、王冠を歯と爪で砕き引っ張る。すると、獅子は非常な怒りにかられて、その脚で狼に一撃を喰らわす」と説明される[13]。すなわちここには、ブルゴーニュ公ジャンがフランス王に忠誠を尽くす愛国者であり、彼は王家を守るためにこそ従兄弟を消したのだという強いメッセージが込められているといえる。

宿敵ルイを死に追いやり自身の立場を確保したジャンであったが、彼自身もまた、一四一九年に、敵対していたアルマニャック派の手にかかり、モントローの街で人生の幕を閉じた[14]。ひたすら戦い前進するというアグレッシブな生涯を通して、拠点のディジョンや北方のブリュッセルよりもパリの宮廷を重視していたと評されるが[15]が、結局、フランス宮廷での主導権を掌握することはできなかった。とはいえ、百年戦争中のフランスと英国の間に立ちつつ、北方のネーデルラントへと支配領域を広げる基礎を築き、息子フィリップ善良公の代の繁栄へと繋いだという点で、ジャンは優れた功績を残したと位置づけられるであろう[16]。

芸術保護という観点からは、フィリップ豪胆公やジャンの叔父にあたるベリー公ジャン（一三四〇～一四一六年）が評価される一方で、ジャン自身は彼らほど芸術にかける財政的基盤を持たなかったとみなされる傾向にあった[17]。しかしながら、ジャンが注文した時禱書（図6）[18]や、妻マルグリットに贈ったと推定される聖務日課書（図7）[19]、あるいは、ジャンの紋章やエンブレム模様で飾られた優雅な杯[20]は、ブルゴーニュ宮廷らしい豪華さを十分に備えている。作品としての質の高さはパリやフランドルの作者たちの腕に負うものだが、それらの美しく端正な様式には、ジャンの感性も反映されたことだろう。近年では、ジャンとマルグリットの写本コレクションの調査などを通して、ジャンの芸術保護が再評価されるところである[21]。

本稿以下では、主にジャン無畏公の肖像に関わるイメージの分析から、このブルゴーニュ公の芸術に対する態度と自己表象に対する意識を探究したい。

二、ジャン無畏公の肖像

①板絵の肖像

歴代のブルゴーニュ公は、自身の姿を、彫刻・板絵・写本など、多様な媒体に描写させた[22]。とくに板絵の肖像画に関しては、どの作品も自然

主義的な様式で、それぞれの公の顔立ちの特徴や、衣服の細かい質感までもが丁寧に描き出されている（図2〜図4、図23）。

ジャン無畏公の肖像で現存数が多い媒体は、板絵と写本挿絵である。この二つの媒体では板絵の方がより大きく、像主の容貌も克明に描写されているので、まずは板絵の肖像を確認したい。

ジャンの板絵の肖像画には、同時代または後世のコピーが複数残される。それは他のブルゴーニュ公の場合と同様に、各地の宮殿に置くためであったり、贈り物とするためのものであった。そこには、像主ジャンの容貌を記録し伝えるという役割と、支配者としての権威を誇示するという機能が託されていたことがうかがえる。こうして各地に流布したジャンの肖像画は、各々縦二〇〜四〇センチ程度の大きさを持ち、図像的には以下の五タイプに分類される（カッコ内は代表例）[23]。〔タイプ①〕顔の左側を捉えたプロフィール（横顔）で、宝石で飾られた黒いターバンのような帽子をつける（図3）。右手は指輪を持ち、左手はヴァロワ王家の紋章模様の布のかかった台に手を置く。原型（オリジナル）は一四〇四〜一〇年頃の作品と推定される。〔タイプ②〕顔の左側を捉えたプロフィールで、帽子はかぶらず、手を合わせる祈禱者の姿（図8）。襟周りの飾り布には、火打石を意匠化したブルゴーニュ公国のエンブレム模様が表わされる。ジャンの晩年に近い描写で、画面上部の銘は、ジャンがモントローで暗殺されたことを伝える[24]。原型の制作年は一五世紀最初の四半期と推定される。〔タイプ③〕顔の左側を捉えたプロフィールで、帽子をかぶり、片手のみ描かれる（ブザンソン美術館）。〔タイプ④〕顔の左側を捉えたプロフィールで、宝石で飾られた黒い帽子をかぶる（ヴェルサイユ宮殿美術館）。両手を描かない稀なタイプである。現存作品は、後世の作とみなされる。〔タイプ⑤〕顔の右から捉えた四分の三観面で、宝石で飾られた黒い帽子をかぶり、ヴァロワ王家の紋章模様の布のかかった台に手を置く（図9）。原型は初期フランドルの画家ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（一三九九／一四〇〇〜一四六四年）によると推定される。

ここに確認されたように、ジャン無畏公の板絵のオリジナルは残っていない。それゆえ、同時代のコピーであっても、オリジナルから改変された可能性を考慮する必要がある。また、後述するように、ジャン自身の意図が反映されているとは限らないヴァージョンもある点にも注意しなくてはならない。とはいえ、少なくとも尖った鼻や下がり気味に結ばれた唇などの容貌に関しては、ジャンの生前に制作された指輪に付されたカメオ（図10）[25]にも認められる特徴であり、本人の顔立ちを反映しているとみなしてよいだろう。

ジャンの肖像画の五類型のうち、四点がプロフィールで表わされている点は興味深い。それは、祖父のフランス王ジャン二世の肖像（図1）や父フィリップ豪胆公の肖像（図2、ただし現存作品は後世のコピー）にもうかがえるように、当時のフランス王家の伝統に従っている。ジャンの墓碑彫刻（図11）についても、ジャン自身が、フィリップ豪胆公の墓碑彫刻（ディジョン美術館）にならうことを望んだと伝えられる[26]。この彫刻がジャンの生前に着手されることはなかったが、フィリップ善良公が父の遺志を汲み、豪胆公のものときわめてよく似た墓碑彫刻を制作させた。

五類型のうち唯一、四分の三観面で捉えられた肖像は、ジャンではなくフィリップ善良公の時代の流行を反映しているように思われる。この点については次章で検討することとしたい。

②写本挿絵の肖像

ジャン無畏公の姿は写本挿絵にも多く見出される（図13～図20）。前述したジャン・プティによる擁護書の挿絵（図5）においても、肖像そのものは描かれないが、「前脚を振りあげる獅子」によりジャンの勇姿が強調されている。

獅子はブルゴーニュ公の紋章要素の一つであったが、写本挿絵の肖像には、紋章のみならず、さまざまなエンブレムやモットーが描き込まれる。以下に詳細を検討するが、ジャンの肖像とエンブレム、モットー、紋章などの「サイン」についての情報をまとめた論稿末の表も参照されたい。

ジャン無畏公は、先代のブルゴーニュ公フィリップが用いたオークの葉などのエンブレムも受け継いだが、一三八五年の結婚を機に、ホップの蔓とモットーの組みあわせを用いるようになった[27]。モットーは「ICH HALTZ MICH（私は沈黙する）」もしくは「ICH HOVD（私は譲らぬ・私は持ち堪える）」である[28]。ヴァージョンとして「ICH SINGHE（私は歌う）」も用いられた。また、鉋と水準儀（レベル）もジャンが好んで用いたエンブレムであり、『ジャン無畏公の時禱書』には、Xの形をした十字架に磔にされたブルゴーニュ公国の守護聖人アンドレを取り囲むように、ブルゴーニュ公の紋章と鉋、そして水準儀が配されている（図6）[29]。

これらのモットーとエンブレムの選択には、宿敵のオルレアン公ルイの存在が大いに関係していた。ルイは、モットー「JE LENNVIE（私こそが悩ます者）」に「節くれだった棒」を組み合わせて用いていたので、ジャンは、「悩ます者」の妨害に「持ち堪え」、「節くれだった棍棒」を「鉋」で滑らかにして退治するという意味を自身のモティーフに込めたのである[30]。ここから、ジャンは、かなりの政治的意図を持ってエンブレムを利用していたといえる。

同様の意図は、ジャンが所蔵した『王と王子の教育書』の最初の頁にも見られる（図12）[31]。挿絵には、玉座に座る王と口述する著者、そして廷臣たちが描かれるが、イニシアルにはジャンの紋章が表わされる。欄外装飾には、鉋、鉋屑、「ドイツの帽子」として知られる鉄のヘルメットが描かれ、ドイツ語で「ICH HALTZ MICH（私は沈黙する）」と記された巻物がホップの穂と絡み合う。ドイツとの関連の強さは、バイエルン出身であったジャンの妻マルグリットを思い起こさせるとともに、フランス語圏以外の地域への政治的配慮も感じさせる。鉋と鉋屑は、前述のとおり、オルレアン公の棍棒を滑らかにするというメッセージである。

続いて、ジャンの肖像と組み合わされたエンブレムとモットーを検討しよう。ジャンが注文したマルコ・ポーロの『驚異の書（東方見聞録）』のフランス語版献呈頁（図13）では、プロフィールで捉えられたジャンが、黒い帽子をかぶり、金のホップの枝葉と鉋、そして水準儀が付された赤と黒からなる衣服を身につけている[32]。その容貌や服装の型は、ジャンの板絵の肖像（図3）とよく似ている。公が座る長椅子には、自身の紋章模様のついた布もかかり、ジャンと献呈者たちを取り囲む建物にも、ジャンの紋章と鉋が繰り返される。鮮やかな草花で飾られた欄外左側には、ホップの枝葉に「ICH SINGHE（私は歌う）」と記された巻物が絡む[33]。

『対話集』では、著者ピエール・サルモンがシャルル六世の質問に応答する場面の中に、廷臣として控えるジャンの姿が繰り返し描かれた（図14～17、図19、図20）[34]。写本の二つのヴァージョンに計七回も登場するジャンは、自身が玉座につく一頁（図18）を除くと、三人の廷臣の一人として、一貫してターバンのような帽子をかぶったプロフィール姿で表わされる。

ただし、衣服の装いは肖像ごとに異なっており、黒地に金の鉋と水準儀模様を施した上着や（図14）、青地に金のホップを散らした袖のある上着（図16）をまとう場合もあれば、緑地に白や金やピンク（図15）、赤と白と緑（図17）、赤と白（図19）、緑と白（図20）を組み合わせた服で表わされる場合もある。また、帽子に関しても、黒だけでなく、赤、緑、白などさまざまな色が用いられ、宝石で飾られるとも限らない。手に木槌や金槌を持つこともある（図18、図19）が、このモティーフもジャンのエンブレムとみなされる[35]。付言すると、先に挙げた指輪の裏側にも鉋の模様が刻まれている（図10）。

以上に検討したように、写本挿絵においては、紋章やエンブレム、あるいはモットーが駆使され、ジャン無畏公の存在と政治的態度が誇示された。改めてみると、ジャン無畏公の顔立ちは、板絵の肖像との類似は明らかなものの、それほど正確には描き出されていない。それは、決して広くないスペースに肖像を描くという制限のためでもあり、だからこそいっそう紋章・エンブレム・モットーによって像主が誰であるかを明示する必要があったと考えられる。ただし、ジャンに関しては、同一写本内でも、その衣服の色やエンブレムの表示方法は少しずつ異なっている。帽子をかぶるプロフィールの姿のみが本人であることを類推する手がかりとなる場合もあるくらいであり、必ずしも明示的とは限らない（図15、図17）。

ここで注目したいのは、ジャンの肖像表現には、ジャンとフランス宮廷との関係の強さがうかがえるという点である。まず、プロフィールで肖像を表わすという方法は、フランス宮廷の伝統で、当時も大いに採用されていた。また、肖像を飾った指輪（図10）も流行しており、ジャンの叔父ベリー公ジャンも、一四〇〇年頃に肖像カメオつきの指輪を二個所有していたと記録される[36]。そして、獅子と狼が戦う寓意的な挿絵（図5）は、まさにフランス宮廷での権力争いを反映している。

ジャンは、同様に、フランス宮廷の関係者に写本の贈呈をしたり、彼らと副本を共有したりしていた。マルコ・ポーロの『驚異の書』（図13）は、一四一三年の新年の贈り物として、ジャンから叔父のベリー公に捧げられた。たしかに、ジャンへの献呈頁のイニシアルに見られる青地に金のフルール・ド・リスの紋章は、ベリー公のものである。また、『王と王子の教育書』の挿絵（図12）は、ジャンが注文し代々のブルゴーニュ公に受け継がれた写本であるが、玉座についているのはフランス王である。それは、この書の底本が、一三七九年にフランス王シャルル五世（在位一三六四〜八〇年）のためにラテン語からフランス語に訳された書であったためである。そして、『対話集』はシャルル六世と著者との対話をテーマとする。当初の注文経緯は明らかではないが、本稿で挙げた『対話集』の二点のヴァージョンも、代々のブルゴーニュ公に所蔵された。とくに最初のヴァージョンはジャンへの献呈頁も含むことから、ジャンが注文に関わったか、あるいは少なくとも受取人であったと推定される[37]。

本章の分析からは、板絵においても写本挿絵においても、ジャンの肖像にさまざまなヴァージョンがあることがうかがえた。肖像としては、板絵作品に基準があると位置づけられるが、写本挿絵においては、多様なエンブレムによってジャンの存在を強調するような工夫が施されている。その表現には、フランス宮廷のなかでのジャンの政治的立場も大きく影響していると考えられるが、それは以下で分析するように、三代目の公フィリップ善良公の肖像と比較することでいっそう明確になるところである。

三、三代目ブルゴーニュ公フィリップ善良公の肖像

ジャン無畏公の息子フィリップは、ジャンが暗殺された一四一九年に三代目の公となり、以後、五〇年近くにわたってブルゴーニュ公国を統治した。その間、フィリップは百年戦争中のイングランドとフランスの間に立ちつつ、ネーデルラントにおける公国の領土を押し広げ、北方への支配力を強めた(38)。

フィリップ善良公は芸術保護者としても名高く、初期フランドル絵画の注文主のなかでもっとも多くの肖像と祈禱者像を残した人物の一人であると位置づけられる(39)。本稿では、代表例として、板絵の肖像（図4）と写本挿絵の献呈像（図21）、そして写本挿絵の祈禱者像（図22）を挙げるに留めるが、後世のコピーやヴァージョン、さらには史料のみ残される情報も含めると、総計で軽く百点以上を超えるイメージが制作された。

フィリップ善良公の板絵の肖像画は三タイプあり、そのうち二タイプの原型はロヒール・ファン・デル・ウェイデンにある(40)。その一点にうかがえるように、フィリップは四分の三観面で、美しいドレープをつくる黒い帽子（chaperon）と黒いベルベットの上着をまとい、手には巻物を持ち、首には自身が一四三〇年に創設した金羊毛騎士団の勲章（頸章）を下げる（図4）。巻物は、自身の善政を仄めかすとも指摘される(41)。

写本挿絵においても、フィリップは四分の三観面で黒い衣服をまとい、金羊毛の勲章を身につける（図21、図22）(42)。その玉座や祈禱台は紋章で装飾され、カラフルな天幕や床は、聖アンドレの十字架や火打ち石などの公国のエンブレムや、フィリップがよく用いたEのイニシアルなどで飾られた(43)。他にも、「AUTRE N'AURAY（他の者を持たぬ）」など、多くのモットーとエンブレムが利用された(44)。

注目すべきことに、フィリップの肖像のほとんどが四分の三観面で捉えられている。これは、制作に携わったロヒールをはじめとする初期フランドルの画家たちの様式上の革新に帰せられるだけでなく、フィリップ善良公の代に支配者の表現が大きく変わったことを示している。同じく四分の三観面で描かれるジャン無畏公の肖像〔タイプ⑤〕は、ジャンの死後に制作されたものであり、フィリップの意向により当世風に表わされたと考えられる(45)。

さらに興味深いのは、板絵においても写本挿絵においても、フィリップ善良公が、画一的ともいえるほど統一的なイメージで描かれているという点である。前述したように、ジャンのまとう服の色は、挿絵によって黒・緑・青・赤などさまざまであった。また、赤い襟をシンプルに宝石で飾るものもあれば（図3）、公国の紋章を強調したり（図12）、上衣にホップや鉋を散りばめる（図14、図16）場合もあった。それに対してフィリップは、素材や型のような細部こそ違えど、総じて黒い衣服をまとい、首には金羊毛騎士団の勲章を下げるという姿で表わされているのである。献呈頁では、四分の三観面を保ちつつ身体を正面に向けることによって（図21）、威厳のある支配者としての姿が強調されている。このように、フィリップ善良公の肖像には、新しい型を開拓したうえで、定型イメージによって自身の姿を確実に示そうとする公の自覚的な態度がうかがえるのである。

他方で、フィリップ善良公の肖像と比べると、ジャン無畏公の肖像表現には幅があり、一貫していないとすら言えるかもしれないほど多様性を有する。

その差異の理由には、第一に、各々の置かれていた立場の違いが挙げら

れる。前述したように、ジャン無畏公は、フランス宮廷の文脈のなかで、王に配慮しつつ自己表現せざるを得なかった。『対話集』では、自身が玉座につく場合を除いて、三名の廷臣の一人としてフランス王に仕えている（図14〜図20）。三者のなかでは識別しやすく示されているものの、第一に尊重されるのがシャルル六世であることにはかわりない。それに対して、フィリップ善良公は、ブリュッセルなどの北方に拠点を移しつつ、よりひたむきに、自身の独立した「ブルゴーニュ国家」を構築しようと試みていた(46)。それゆえ、フランス宮廷とは距離を置きつつ、より自立的に独自の表現コードを開拓し、統一的なイメージを築きあげることができたのではないだろうか。

　支配者としてのフィリップ善良公のイメージが有効であったことは、彼の肖像が「モデル（模範）」として宮廷に広まっていたことにうかがえる。四代目ブルゴーニュ公となったシャルル突進公（図23）は、暗い背景に四分の三観面、黒色の服に金羊毛の頸章をつける姿で表わされる(47)。服飾に関しては独自路線も展開したシャルルであるが(48)、本肖像においては、明らかにフィリップ善良公の肖像を踏襲している。

　フィリップ善良公の黒の装いは、一五世紀中頃以降に宮廷関係者にも広まった。その様子は、ロヒールによる《ボーヌの祭壇画》（ボーヌ施療院）に描かれた祈禱者ニコラ・ロランや、ハンス・メムリンクの《ダンツィヒの祭壇画》（グダニスク、国立美術館）に描かれた在ブリュージュのイタリア商人の姿など、多数の初期フランドル絵画の描写にうかがえる。フィリップが黒い衣服を好んだ理由についてはさまざまに考察されるが、本稿の文脈では、フィリップ善良公が、父ジャン無畏公への喪の表明を契機に、既に流行していた黒をさらに広める主体者となったという点が重要である(49)。さらに、定型を繰り返すという手法は、シャルル突進公の妻マーガレット・オブ・ヨーク（一四四六〜一五〇三年）へと自覚的に受け継がれていった(50)。

　以上の検討からうかがえるように、ジャン無畏公とフィリップ善良公の肖像描写には、各々の置かれた環境や態度が如実に反映されている。支配者としての自立的な態度を感じさせるのはフィリップ善良公であるが、ジャンの板絵の肖像（図3、図8、図9）や自身への献呈図（図18）でも、その威厳が十分に示されている。とくに、ジャンの状況に応じて表現を変えるという柔軟性も評価されるべきであり、その幅のある表現コードは、フィリップ善良公が自身の肖像イメージを確立していく時に大いなる参考となったのではないだろうか。この点でジャンは、ブルゴーニュ公としての伝統を引き継ぎ発展させるために重要な役割を果たしたと位置づけられるであろう。

おわりに

　本稿の分析で示されたように、ジャン無畏公の肖像は多様な表現を含んでいた。絵画に関しては、プロフィールで表わされた板絵の肖像画が原型となり、写本挿絵や装飾品に転用されていったと捉えられる。その克明な描写や繊細な仕上げには美的価値の高さもうかがえたが、各肖像に託された政治的な示威も大きかった。とくに写本挿絵においては、紋章やエンブレム、あるいはモットーが活用され、ブルゴーニュ公としての権威やメッセージが示された。なかでも狼を退治したり、「鉋で（棍棒を）削る」といった表現からは、政敵を攻撃し、優位に立とうとする態度が顕著にうか

がえた。

ジャンが権威を誇示したいと望んだ対象は、まずはパリのフランス宮廷関係者であった。その志向性は、自身のブルゴーニュ国家設立を目指したフィリップ善良公の肖像表現との差異にもあらわれている。ただし、ジャンの柔軟な肖像表現があったからこそ、フィリップ善良公の自立的・統一的な肖像表現が開拓された可能性もうかがえた。

ジャンの肖像においてもう一点特徴的なのは、歴代の公と比べても、宗教的な文脈のなかで表わされる祈禱者像の現存数が少ないことである。この問題は、ジャンの信仰生活や宗教組織との関わりも含めて検討していくこととしたい。

註

(1) ヨーロッパ中世末期と初期フランドル美術の肖像表現については以下を参照。John Pope-Hennessy, *The Portrait in the Renaissance*, New York, 1966（ジョン・ポープ＝ヘネシー、中江彬ほか訳『ルネサンスの肖像画』中央公論美術出版、二〇〇二年）; Guy Bauman, "Early Flemish Portraits 1425-1525," *The Metropolitan Museum of Art Bulletin*, 43, 1986, pp. 1-64; Dominic Olariu, éd., *Le portrait individuel: réflexions autour d'une forme de représentation XIIIe-XVe siècles*, Bern, 2009; 今井澄子『聖母子への祈り—初期フランドル絵画の祈禱者像—』国書刊行会、二〇一五年。

(2) 本作品については以下を参照。Charles Sterling, *La Peinture médiévale à Paris: 1300-1500*, Vol. 1, Paris, 1987, pp. 146-149.

(3) プロフィールと古代メダルの伝統については以下を参照。Pope-Hennessy, *op.cit.*

(4) Werner Paravicini, "The Court of the Dukes of Burgundy: A Model for Europe?," in Ronald G. Asch & Adolf M. Birke, eds., *Princes, Patronage, and the Nobility*, Oxford, 1991, pp. 69-102.

(5) 初期フランドル絵画の肖像については以下を参照。Bauman, *op.cit.*, pp. 1-64.

(6) アルマニャック派との闘争からジャン無畏公のイメージを論じたのは以下の書。Simona Slanička, *Krieg der Zeichen: die visuelle Politik Johanns ohne Furcht und der armagnakisch-burgundische Bürgerkrieg*, *Veröffentlichungen des Max-Planck-Instituts für Geschichte*, 182, Göttingen, 2002.

(7) ジャン無畏公の治世を中心としたブルゴーニュ公国の歴史については、主に以下を参照。Joseph Calmette, *Les Grands ducs de Bourgogne*, Paris, 1976（ジョゼフ・カルメット、田辺保訳『ブルゴーニュ公国の大公たち』国書刊行会、二〇〇〇年）; Richard Vaughan, *John the Fearless: The Growth of Burgundian Power*, Woodbridge, 2002; Bertrand Schnerb, *Jean sans Peur: le prince meurtrier*, Paris, 2005.

(8) Calmette, *op.cit.*, pp. 84-86; Schnerb, *op.cit.*, pp. 61-110.

(9) "... car j'ay très-grant désir de moy avanchier..." Kervyn de Lettenhove, *Oeuvres de Froissart, Chroniques*, t. IV, Bruxelles, 1871, p. 219.

(10) "assés sage, courtois, traittable, humble et débonnaire..." Froissart, *op.cit.*, p. 218.

(11) Calmette, *op.cit.*, p. 103.

(12) 本挿絵については以下を参照。Exh.Cat., *Art from the Court of Burgundy: The Patronage of Philip the Bold and John the Fearless*, Stephen N. Fliegel & Sophie Jugie, Musée des Beaux-Arts, Dijon/ Cleveland Museum of Art, Cleveland, 2004, pp. 39-40.

（13）"Par force le leu rompt et tire/ A ses dens et gris la couronne, / Et le lyon par très grant ire/ De sa pate grant coup luy donne." 訳文は以下を一部改変して引用した。カルメット（田辺訳）、前掲書、一三七頁。

（14）ジャン無畏公の暗殺については以下を参照。Vaughan, *op.cit.*, pp. 263-286; Schnerb, *op.cit.*, pp. 671-689.

（15）Calmette, *op.cit.*, p. 174.

（16）Calmette, *op.cit.*, pp. 172-176. 百年戦争については以下を参照。城戸毅『百年戦争―中世末期の英仏関係―』刀水書房、二〇一〇年。

（17）Slanička, *op.cit.*

（18）本書については以下を参照。Victor Leroquais, *Un Livre d'heures de Jean sans Peur duc de Bourgogne (1404-1419)*, Paris, 1939; Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, p. 118.

（19）本書については以下を参照。Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, p. 122; Exh.Cat., *Paris 1400: les arts sous Charles VI*, Musée du Louvre, Paris, 2004, pp. 270-271; Exh.Cat., *Miniatures flamandes*, *op.cit.*, pp. 159-161. 本挿絵（fol. 188v.）の欄外では、若い女性がジャンの紋章とマルグリットの紋章を持つ。フランス語のルブリカと聖女マルガレータ・聖アガタの描写から、本書はマルグリットのために制作されたとみなされることが多い。

（20）Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, pp. 133-134.

（21）Schnerb, *op.cit.*, pp. 445-464; Delphine Jeannot, *Le mécénat bibliophilique de Jean sans Peur et de Marguerite de Bavière (1404-1424)*, Turnhout, 2012.

（22）ブルゴーニュ公の肖像については、主に以下を参照。Maurice Smeyers, *Flemish Miniatures from the 8th to the mid-16th Century*, Turnhout, 1999; Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*; Exh.Cat., *Splendour of the Burgundian Court: Charles the Bold (1433-1477)*, Susan Marti et al., eds., Historisches Museum Berne, Bruxelles, 2009; Exh.Cat., *Miniatures flamandes, 1404-1482*, Bernard Bousmanne & Thierry Delcourt, éds., Bibliothèque nationale de France/ Bibliothèque royale de Belgique, Paris/ Bruxelles, 2011; Wim Blockmans et al., *Staging the Court of Burgundy*, Turnhout, 2013.

（23）Exh.Cat., *The Road to Van Eyck*, Stephan Kemperdick & Friso Lammertse, Museum Bojimans Van Beuningen, Rotterdam, 2012, pp. 250-251.

（24）銘は「1419 IEAN DUC DE BOGNE FVC OCCIS A MOTEREAV」と記される。本作品については以下を参照。Micheline Comblen-Sonkes, *Les Musées de l'Institut de France*, Corpus, 15, Bruxelles, 1988, pp. 1-15.

（25）ジャン無畏公の指輪については以下を参照。Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit*, p. 134; Exh.Cat., *Paris 1400...*, *op.cit.*, pp. 135-140.

（26）Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, p. 251.

（27）ジャンをはじめとするブルゴーニュ公のエンブレム使用については以下を参照。Michel Pastoureau, "Emblèmes et symboles de la Toison d'or," dans Christiane van den Bergen-Pantens et al., éds., *L'ordre de la Toison d'or, de Philippe le Bon à Philippe le Beau (1430-1505): idéal ou reflet d'une société?*, Turnhout, 1996, pp. 99-106; Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, pp. 81-83; Michel Pastoureau, "Armoiries, devises, emblèmes: Usages et décors héraldiques à la cour de Bourgogne et dans les Pays-Bas méridionaux au XVe siècle," dans Exh.Cat., *Miniatures flamandes*, *op.cit.*, pp. 89-102. また、ポワティエ大学の「西洋中世エンブレムデータベース（La Base DEVISE）」も参照。http://base-devise.edel.univ-poitiers.fr/index.php（二〇一九年一月五日閲覧）

（28）Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, p. 83.

(29) 本挿絵については以下を参照。Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, p. 118.

(30) Calmette, *op.cit.*, p. 109; Pastoureau, *op.cit.*, 2011, p. 101.

(31) 本書については以下を参照。Bernard Bousmanne et al., éds., *La Librairie des ducs de Bourgogne, manuscrits conservés à la Bibliothèque royale de Belgique*, Vol. II, Bruxelles, 2003, pp. 115-118; Rob Dückers, Pieter Roelofs, eds., *The Limbourg Brothers: reflections on the origins and the legacy of three illuminators from Nijmegen*, Leiden, 2009, pp. 408-409.

(32) Sterling, *op.cit.*, pp. 370-375; Exh.Cat., *Art from...*, p. 119.

(33) 四隅の装飾は後補である。Exh.Cat., *Art from...*, p. 119.

(34) 本書については以下を参照。Sterling, *op.cit.*, pp. 360-369; Exh.Cat., *Art from...*, pp. 43-45, 81-83; Exh.Cat., *Paris 1400...*, *op.cit.*, pp. 120-123; Exh.Cat., *Illuminating Fashion: Dress in the Art of Medieval France and the Netherlands, 1325-1515*, Morgan Library & Museum, New York, 2011, pp. 118-121, 130-133.

(35) Pastoureau, *op.cit.*, 2011, p. 92.

(36) Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, p. 134.

(37) Exh.Cat., *Paris 1400...*, *op.cit.*, pp. 120-123. ただし、二番目のヴァージョンには献呈頁がおさめられていない。この点に作者とジャンの複雑な関係が読み込まれることもある。Exh.Cat., *Art from...*, *op.cit.*, p. 45.

(38) フィリップ善良公の治世については以下を参照。Calmette, *op.cit.*, pp. 177-230; Richard Vaughan, *Philip the Good: The Apogee of Burgundy*, Woodbridge, 2002.

(39) フィリップ善良公の肖像については、註22に挙げた文献と以下を参照。Jeffrey Chipps Smith, *The Artistic Patronage of Philip the Good*, Ph.D. Diss., Columbia University, 1979, pp. 279-331; Micheline Comblen-Sonkes, *Le Musée des Beaux-Arts de Dijon*, Corpus, 14, Bruxelles, 1986, pp. 220-232; Dirk de Vos, *Rogier van der Weyden: l'œuvre complet*, Paris, 1999, pp. 372-373; Élodie de Zutter, "L'exception qui confirme la règle: contribution à l'étude des portraits de Philippe le Bon, Duc de Bourgogne," *Revue belge d'archéologie et d'histoire de l'art*, 83, 2014, pp. 5-50; 今井、前掲書、二〇一五年、二六三〜二七四頁；今井澄子「フィリップ善良公の祈禱者像—初期ネーデルラント美術における聖俗・公私の交錯—」『移ろう形象と越境する芸術—小林頼子先生退職記念論文集』八坂書房、二〇一九年、一七三〜二〇三頁。

(40) De Zutter, *Ibid.*

(41) Till-Holger Borchert, "The Image of Charles the Bold," in Exh.Cat., *Splendour...*, *op.cit.*, pp. 73-81, in part. p. 74.

(42) フィリップ善良公への献呈図には多数のヴァージョンが残される。以下を参照。Pascal Schandel,"Les images de dédicace à la cour des ducs de Bourgogne: Ressources et enjeux d'un genre," dans Exh.Cat., *Miniatures flamandes*, *op.cit.*, pp. 66-80.

(43) 図22については以下を参照。Exh.Cat., *Miniatures flamandes*, *op.cit.*, pp. 254-255.

(44) フィリップ善良公のモットーとエンブレムについては以下を参照。Pastoureau, *op.cit.*, 1996, 2011.

(45) Exh.Cat., The *Road to...*, *op.cit.*, pp. 250-251.

(46) Borchert, *op.cit.*, p. 76.

(47) シャルル突進公の肖像については主に以下を参照。De Vos, *op.cit.*, pp. 308-310; Borchert, *Ibid.*; 今井澄子「ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの祈禱者像」『大阪大谷大学　歴史文化研究』第一六号、二〇一六年、一〜二〇

頁。

（48）シャルル突進公の服装に関しては以下を参照。Margaret Scott, “The Role of Dress in the Image of Charles the Bold, Duke of Burgundy,” in Elizabeth Morrison & Thomas Kren, eds., *Flemish Manuscript Painting in Context: Recent Research,* Los Angeles, 2006, pp. 43-56; Exh.Cat., *Illuminating Fashion, op.cit.,* pp. 174-177, 208-211.

（49）“Et le duc bourgongnon ... toutesvoies n’estoit vestu encores que de noir, ...” Kervyn de Lettenhove, éd., *Œuvres de Georges Chastellain,* I, Bruxelles, 1863, pp. 187-188; 徳井淑子「フィリップ善良公の“涙の文様の黒い帽子”―中世末期のモード・文学・感性―」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第五〇巻、一九九七年、三三三〜三三五頁。以下も参照。Sophie Jolivet, “Le phénomène de mode à la cour de Bourgogne sous Philippe le Bon: l’exemple des robes de 1430 à 1442,” *Revue du Nord,* 365, 2006, pp. 331-345; Sophie Jolivet, “La construction d’une image: Philippe le Bon et le noir（1419-1467）,” *Apparence(s),* 2015. https://apparences.revues.org/1307（二〇一九年一月九日閲覧）

（50）詳細は以下の拙稿を参照。今井澄子「ブルゴーニュ公妃マーガレット・オブ・ヨークの祈禱者像」『大阪大谷大学　歴史文化研究』第一八号、二〇一八年、一〜二五頁。

【図版出典】

図1　https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:John_II_of_France

図2、図3、図8　©IRPA

図4、図9、図23　Exh.Cat., *Splendour of the Burgundian Court,* Historisches Museum Berne, Bruxelles, 2009.

図5〜図7、図10、図13、図19　Exh.Cat., *Art from the Court of Burgundy,* Musée des Beaux-Arts, Dijon et al., 2004.

図11　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Gisant_de_Jean_sans_Peur.jpg

図12、図21、図22　Exh.Cat., *Miniatures flamandes,* Bibliothèque nationale de France et al., Paris/ Bruxelles, 2011.

図14、図15、図17　https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Dialogues_de_Pierre_Salmon

図16、図20　Exh.Cat., *Illuminating Fashion,* Morgan Library & Museum, New York, 2011.

図18　https://gallica.bnf.fr

〈表：写本挿絵に描かれたジャン無畏公のイメージ〉

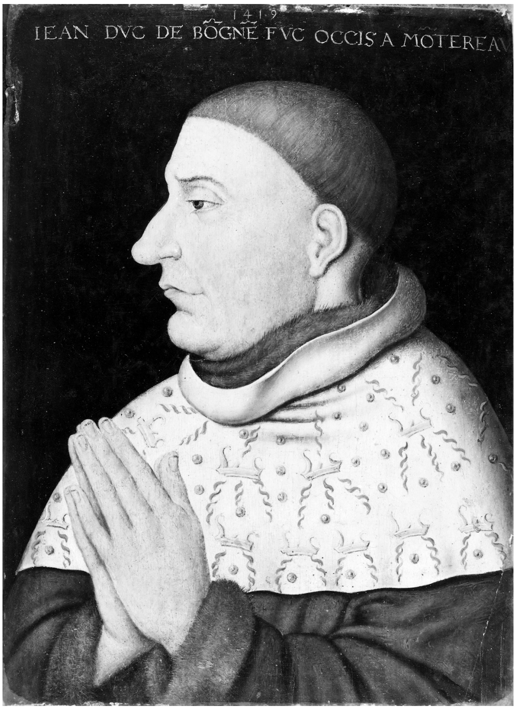
※作品情報には、作者（制作地)、作品名、著者、書名、制作年、(写本一頁の）サイズ、所蔵先の順に判明した限りの情報を載せた。

	作品情報	ジャン無畏公の姿と「サイン」	備考
図5	パリ《獅子と狼の戦い》ジャン・プティ『オルレアン公ルイの死に際してのブルゴーニュ公の役割の擁護』1410 年頃、19.3×14cm、ウィーン、オーストリア国立図書館、Cod. 2657, fol. 1v.	＊フランス王冠を守る獅子として表わされる。	
図6	ヘント派？《聖アンドレ》『ジャン無畏公の時禱書』1406-19 年頃、14×10cm、パリ、フランス国立図書館、ms. n.a.l. 3055, f. 127v.	＊紋章 ＊エンブレム…鉋、水準儀。	
図12	北フランスまたは南ネーデルラント《王と廷臣たち》『王子の教育書』（ジャン・ゴラン翻訳）、1404-19 年、30.5×20.8cm、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、ms. 9475, fol. 1 .	＊紋章。 ＊エンブレム…鉋、鉋屑、ホップ、ドイツの帽子。 ＊モットー「ICH HALTZ MICH」。	
図13	パリ《ジャン無畏公への献呈》マルコ・ポーロ『驚異の書』1410-12 年頃、42×29cm、パリ、フランス国立図書館、ms. fr2810, fol. 226.	＊肖像…顔の右側を見せるプロフィール、黒い帽子、赤・黒の衣服に金の鉋、水準儀、ホップ模様。 ＊紋章…長椅子、タンパン。 ＊エンブレム…鉋、水準儀、ホップ。 ＊モットー「ICH SINGHE」（ホップに絡まる)。	・玉座につき、写本の献呈を受ける。
図14	パリ《王への献呈》ピエール・サルモン『対話集』1410 年頃、28×20.5 cm、パリ、フランス国立図書館、ms. fr. 23279, fol. 1v.	＊肖像…顔の左側を見せるプロフィール、黒の帽子に赤・白の宝石、黒地の衣服に金色の鉋・水準儀模様、裏地は金色、赤い襟、右手に指輪を持つ。 ＊エンブレム…鉋、水準儀。	・フランス王シャルル六世に仕える廷臣の一人として表わされる。
図15	《王からの質問を受けるサルモン》（書名・所蔵先等は図 14 と同じ)、 fol. 5.	＊肖像…顔の右側を見せるプロフィール、緑の帽子に赤い宝石、緑地に金色の裏地の服、ピンク色の上衣。	・図 14 と同じ。
図16	《王からの質問を受けるサルモン》（書名・所蔵先等は図 14 と同じ)、 fol. 19.	＊肖像…顔の右側を見せるプロフィール、赤の帽子、青地に金のホップ模様の服、裏地はグレー。 ＊エンブレム…ホップ。	・図 14 と同じ。
図17	《王への献呈》（書名・所蔵先等は図 14 と同じ)、fol. 53.	＊肖像…顔の左側を見せるプロフィール、白の帽子、赤地の服、緑の襟。	・図 14 と同じ。
図18	《ジャン無畏公への献呈》（書名・所蔵先等は図 14 と同じ)、fol. 119.	＊肖像…四分の三観面、黒色の帽子に赤・白の宝石、黒地に金の模様の服、手には槌を持つ。 ＊エンブレム…槌、ホップと鉋。	・玉座につき、写本の献呈を受ける。
図19	パリ《王への献呈》ピエール・サルモン『対話集』1414 年頃、26.5×19.5cm、ジュネーヴ大学公共図書館、ms. fr. 165, fol. 4.	＊肖像…顔の右側を見せるプロフィール、白の帽子に宝石、赤地の服（薄く水準儀の模様？)、裏地は白、手には槌を持つ。 ＊エンブレム…水準儀（？)、槌。	・シャルル六世に仕える廷臣の一人として表わされる。
図20	《王からの質問を受けるサルモン》（書名・所蔵先等は図 19 と同じ)、fol. 7.	＊肖像…顔の右側を見せるプロフィール、緑の帽子、緑地の服、手には本を持つ。首回りとベルトに妻マルグリットを表わすMとデイジーの花。 ＊エンブレム…M、デイジー。	・図 19 と同じ。

（右）図１　《フランス王ジャン２世》1350年以前、59.8×44.6cm、パリ、ルーヴル美術館
（左）図２　《フィリップ豪胆公》17世紀（原型は1400年頃）、42×28cm、ディジョン美術館

（右）図３　《ジャン無畏公》1500年頃（原型は1404-10年頃）、29×21cm、パリ、ルーヴル美術館
（左）図４　ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（コピー）《フィリップ善良公》15世紀後半、32.5×22.4cm、ブリュージュ、市立美術館

（右）図５　パリ《獅子と狼の戦い》ジャン・プティ『オルレアン公ルイの死に際してのブルゴーニュ公の役割の擁護』1410年頃、ウィーン、オーストリア国立図書館、Cod. 2657, fol. 1v（部分）
（左）図６　ヘント派？《聖アンドレ》『ジャン無畏公の時禱書』1406-19年頃、パリ、フランス国立図書館、ms. n.a.l. 3055, fol. 127v（部分）



（右）図７　パリ『ジャン無畏公の聖務日課書』1413-19年頃、ロンドン、大英図書館、MS Harley 2897, fol. 188v（部分）
（左）図８　《ジャン無畏公》（原型は1401-25年頃）、36.8×26.8cm、シャンティイ、コンデ美術館

（右）図９　ロヒール・ファン・デル・ウェイデン周辺《ジャン無畏公》15世紀中頃、21×14cm、アントウェルペン、ベルギー王立美術館
（左）図10　パリ《ジャン無畏公の指輪》高さ1.5cm、直径2.3cm、1410-19年頃、金、めのう、黒玉、エメラルド他、パリ、ルーヴル美術館、inv. OA 9524

図11　ジャン・ド・ラ・ユエルタ他《ジャン無畏公と妻マルグリットの墓》（部分）、1443-70年、黒大理石、彩色された石・鍍金された大理石、ディジョン美術館、inv. CA1417

（右）図12　北フランスまたは南ネーデルラント《王と廷臣たち》『王と王子の教育書』（ジャン・ゴラン翻訳）、1404-19年、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、ms. 9475, fol. 1

（左）図13　パリ《ジャン無畏公への献呈》『驚異の書』1410-12年頃、パリ、フランス国立図書館、Ms. Fr2810, fol. 226

（右）図14　パリ《王への献呈》ピエール・サルモン『対話集』1410年頃、パリ、フランス国立図書館、ms. fr. 23279, fol. 1v（部分）

（左）図15　パリ《王からの質問を受けるサルモン》ピエール・サルモン『対話集』1410年頃、パリ、フランス国立図書館、ms. fr. 23279, fol. 5（部分）

（右）図16　パリ《王からの質問を受けるサルモン》ピエール・サルモン『対話集』1410年頃、パリ、フランス国立図書館、ms. fr. 23279, fol. 19（部分）
（左）図17　パリ《王への献呈》ピエール・サルモン『対話集』1410年頃、パリ、フランス国立図書館、ms. fr. 23279, fol. 53（部分）

（右）図18　パリ《ジャン無畏公への献呈》ピエール・サルモン『対話集』1410年頃、パリ、フランス国立図書館、ms. fr. 23279, fol. 119（部分）
（左）図19　パリ《王への献呈》ピエール・サルモン『対話集』1414年頃、ジュネーヴ大学公共図書館、ms. fr. 165, fol. 4（部分）

（右）図20　パリ《王からの質問を受けるサルモン》ピエール・サルモン『対話集』1414年頃、ジュネーヴ大学公共図書館、ms. fr. 165, fol. 7（部分）
（左）図21　ジラール・ド・ルシヨンの画家《フィリップ善良公への献呈》『ジラール・ド・ルシヨンの物語』1448年以降、ウィーン、オーストリア国立図書館、ms. 2549, fol. 6（部分）

（右）図22　ウィレム・ヴレラン《受胎告知と祈禱者フィリップ善良公》『天使祝詞論』1461年頃、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、ms. 9270, fol. 2v（部分）
（左）図23　ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（コピー）《シャルル突進公》15世紀後半、50.9×33.6cm、ベルリン、国立絵画館